

希望は残っているのか —メキシコ、オブラドールの大勝から 1 年を経て—

受田 宏之

大阪サミットの大統領欠席と移民問題

メキシコをフィールドとする研究者として、本誌に2年前、「オブラドールは左派のポピュリストとみなせるが、2018年の総選挙で勝利する可能性がある。」という趣旨の文章を書いた¹。1年前に行われた選挙において、オブラドールは53%という過半の得票で大統領に選出され、彼を支持するために作られた政党 MORENA (国民刷新運動) と PT (労働党)、PES (社会結集党) の連合「ともに歴史を作ろう (Juntos Haremos Historia)」は、連邦議会の下院で62% (500議席中 308 議席)、上院でも54% (128 議席中 69 議席) という歴史的な勝利を収めた。2000年に PAN (国民行動党) のフォックス政権が誕生した時も大きな期待が寄せられたが、それまで71年間にわたり一党優位を維持してきた PRI (制度的革命党) はいまほど勢力と正統性を失っていなかったし、PAN が中道右派路線だった点でも、オブラドール政権ほどの断絶はともなっていなかった。「腐敗の一掃」と「新自由主義の克服」を掲げて勝利した同政権は、独立、ファレスの改革、革命に次ぐメキシコの「4番目の転換」をもたらすと豪語する。だが、オブラドールの言動、彼について書かれた論説、および階層や政治観の異なる友人たちから聞いた意見から浮かび上がるのは、積年の課題が解決される期待というよりは、むしろメキシコが築いてきた価値あるものが失われてしまうのではないかという不安である²。

2019年6月のG20大阪サミットにオブラドールが欠席したことは、メキシコ人には驚くには当たらない。彼は内政に重きをおくと公言し、国外に出ないからである。主要国の首脳外交など形式に過ぎず、世界の不平等の改善には貢献しないというのが彼の持論らしい。だが、少なくとも移民問題に関しては、メキシコ、およびメキシコ以上に貧困や犯罪組織の脅威に晒されている中米諸国の利益になる政策を彼は実行できていない。中米諸国からアメリカを目指す人びとのキャラバンがメキシコを通過するのをオブラドールは黙認していたが、トランプ政権に彼らを受け入れる意思はなく、移民の流れを減らさないと輸入品に一律5%の関税をかけると脅され

ると、それに屈したかのごとく、南部国境に国民警護隊 (Guardia nacional) を派遣し、取り締まりを強化している³。センシティブな外交課題であり、内政にも影響を及ぼす移民問題について、オブラドールはどのような見取り図を描いていたのであろうか。麻薬カルテルに対抗するために創設された警護隊は、装備や人員、指揮系統において軍隊に近く、人権侵害や暴力の一層の激化を招きかねないと危惧されているが⁴、実際にやっているのは、(PAN や PRI 政権下での警察と変わらぬ)「弱い者いじめ」ではないかと揶揄されている。

これらのニュースは日本でも比較的よく知られている。しかし、国内向け政策において、反対者にはいうまでもなく、支持者に対しても納得できる成果を新政権は示せずにいる。

強引さ、曖昧さの目立つ政策

オブラドール政権の9か月間の政策を特徴付けるとしたら、強引さと曖昧さが目立ち、先行きへの不安が高まっているということになる。最も論争と混乱を呼んだ政策が、上からの財政切り詰めである。「これまでの政府には数多くの腐敗や無駄があり、それを削って恵まれない人びとへの支援」に回すという論理に従っているのだが、大統領や高官の給与削減やその他特典の廃止のうちはまだよかった。だが次第に、各公的機関に支出30%減を求めるといった形で切り詰め自体が半ば目的化され、非正規雇用の職員がリストラの対象となり、市民社会組織への支援は減らされ、さらに難病患者への補助が打ち切られるといった事態が生じることになる。これらの人びとはむしろオブラドールの支持層をなしたのであり、もたらした失望は深い。

こうした強引さに加えて、執筆者が納得できないのは、左派を標榜しているのに、増税、それも累進的な性格の課税を通じての増税を目指そうとしないことである。元々不平等な社会として知られるラテンアメリカでは、新自由主義の下で、条件付き現金給付をはじめとする貧困層向けの社会政策が導入され、一定の所得分配の改善が達成された。だが、そ

これは政治的に実現容易なモデルであり、今後は税制改革や社会保障制度の改革を通じて、政治的により困難な福祉モデルを確立できるかが課題とされる⁵。OECDによれば、2016年のメキシコの国民負担率はわずか22.0%（租税負担率が19.6%、社会保障負担率が2.4%）だったが、これは韓国の39.2%（同27.4%と11.8%）よりも大幅に低く、チリの24.2%（22.0%と2.1%）にも劣る⁶。PEMEX（国営石油公社）からの純収入が増える見込みは乏しいので、どうやって低所得層に資するプログラムの財源を確保するのだろうか。

オブラドールが低所得層を意識して行った政策として、（元々低過ぎる水準にあった）最低賃金の16%引き上げ、（ともに非拠出型の）高齢者への年金と高校生・大学生・若年無業者への奨学金の拡充などがあるが、これらは「第4の転換」と呼ぶほど斬新なメニューとはいえないだろう。支出面において、派手さはあるものの、収益性や環境負荷、持続可能性の点から反発を招いている計画の中には、建設途上だったメキシコ市近郊のテスココ新空港の中止とサンタルシア軍用空港の拡張と転用、PEMEXの新精錬所（Dos Bocas）建設、1,500kmの「マヤ鉄道」の敷設、100の新規公立大学の創設などがある。任期中のGDP成長率4%を掲げていたものの、INEGI（統計地理情報局）の推計によれば、2019年上半期のGDP成長率は0.2%に過ぎない。経済動向以上に市民にとって切実な問題といえる治安についても、2019年1～7月期までの殺人件数は20,135件であり、前年を上回るペースとなっている⁷。

これまでの実績が期待を下回るだけでなく、大統領の運営スタイル自体を問う出来事が7月に起きた。バランスを重視する穏健派エコノミストとして知られるウルスア（Carlos Manuel Urzúa Macías）蔵相が、大統領宛てに以下のような辞表を突き付け、辞任したのである。

—経済面についての不一致はたくさんありました。不一致の中には、本政権において十分な裏付けのない政策決定がなされてきたことが原因のものもありました。私は、すべての経済政策はエビデンスに依拠しつつ、右派か左派かを問わずあらゆる極論とは距離をおき、それが及ぼし得る様々な効果に留意しながら実施されねばならないと確信しています。しかしながら、私の在任中、こうした確信は共有されませんでした。それに加え、

国家財政に関する知識を持たない官僚が命名されることは受け入れ難いものでした。これは現政権の有力者の意向によりなされたのですが、利益相反の恐れもあります。—（執筆者記）

前蔵相の文面からは、政権内で専門家の意見が尊重されないだけでなく、自己利益のために政策に介入する人間の存在が示唆されている。次節では、混乱の背景をなすオブラドールという人物および彼を取り巻く政治状況について考察したい。

過去への回帰と呉越同舟

オブラドールは、「自分たちだけが正しい」という反多元主義、権力への執念、人を陶醉させるカリスマ性（弁舌が立つ、タフさ、エリート批判）等、ポピュリストの要件を兼ね備えた人物である。彼専用のTV番組の中で、毎朝、国民に向けて計画とその正しさについて語りかけ、記者からの質問に答えることなど、ラテンアメリカのポピュリストにしかできる業ではない。新政権が約束をこれまで果たせていなくても、「変革には時間がかかるのもっと待ってみたい」というメキシコ人は、オブラドールの主要な支持層でありTVを重要な情報源とする低所得層の間で多いのはもちろんのこと、変革に期待して投票したことを後悔したくないと考える中所得層の間でもみられる。

だが、オブラドールを評価するとき、「未来を志向するよりも過去への郷愁を持つ」、「権力獲得のためには主義に反することを厭わない」ポピュリストであることにも目を向けねばならない。オブラドールがテクノクラートを嫌い、国際関係を苦手とする一方で、（カトリック教会等の保守勢力に対抗しな



大統領官邸（Los Pinos）の一般公開（2018年12月1日）
出所：https://www.gob.mx/presidencia/es/archivo/galerias?filter_id=5170&filter_origin=archive&idiom=es&page=52（2019年9月8日閲覧）

がら自由主義的な改革を実現した) ファレス大統領、(PEMEX の国有化や農地改革など社会主義的な政策を実施した) カルデナス大統領等の歴史に名を刻む政治家を模範にしている、とはよくいわれる。批判派によれば、それ故に、彼から新しい何かを期待はできないことになる⁸。

また、建前では富裕層 (los fifis) と汚職を嫌悪し、弱者の味方で正義を体現するかのように振る舞いながら、権力基盤を固めるためにはそれと違った行動を取るのを厭わないことは、左派の一部識者も非難してきたオブラドールの暗部である⁹。新興政党の不利を克服すべく、党勢の拡大を重視したため、与党連合は、左派知識層のグループ、低所得層を基盤とするがクライエントリズムを批判されることもあるグループ、PRI や PRD (民主革命党) に元は所属し次期大統領を目指すような有力政治家 (Marcelo Ebrard、Ricardo Monreal、Manuel Bartlett Díaz 等) のグループ、企業家との結び付きが深いとされるグループ、プロテスタント再洗礼派の支持を受けたグループ (PES¹⁰) 等、様々な派閥を抱え込むことになった。こうした「異越同舟」はオブラドールによる極端な政策を阻むという効果を持ち得る反面、体系的で一貫性のある政策の実現を望み薄とする。

メキシコはアメリカのように民主主義の長い歴史を有する国ではないが、共和党と民主党がルールを軽視し、「仁義なき戦い」を行うようになったことがトランプ政権誕生の下地を作ったように、オブラドールは、汚職等により PRI、PAN に PRD という既成政党への不信感が高まっていたところに、自らのメシア的なイメージを広く訴えかけることにより、地滑り的な勝利を収めることができた。メディアやアカデミーを含む批判者への不寛容な姿勢、政策評価機関の CONEVAL (全国社会開発政策評価審議会) 廃止の検討¹¹ 等、懸念材料がないことはないが、ポピュリスト政権を抱えた多くの国々が経験したような権威主義化の動きは、今のところみられない。政治学者によれば、それを防ぐ王道は、野党および与党の良識派がルールを守った政治の実践へと回帰することである¹²。最悪のシナリオは、経済低迷や治安の悪化等、実績が上向くことなく、政権の正統性が大きく低下し、(かつてオブラドールがよく用いた手段でもあるのだが) 激しい直接行動などによって揺さぶられたときである。オブラドールは熱烈な支持者および機会主義者たちと、民主主義のルールを

改竄したり、敵対者を弾圧しようとする誘惑にかられるかもしれない。そのとき、野党と与党の民主主義擁護派がそれを断固として拒否することができれば、メキシコの民主主義は守られることになる。

それでも希望を持ちたいが…

“El Universal” 紙のアンケートによれば、オブラドール大統領のスタンスについて「全面的ないしどちらかといえば賛成」が2018年8月に64.6%、2018年11月に55.6%、2019年3月に79.4%、2019年6月に72.7%を占めた。また、メキシコの現状への満足度を10段階で答えてもらう質問に対しては、2018年8月が4.14点、2018年11月が4.07点、2019年3月が5.75点、2019年6月が5.82点となっており、評価が1年の間に下がる趨勢にあるということはない¹³。不満があっても、オブラドールに期待する国民は依然として多数派である。

執筆者にも、友人の研究者や改革派の神父、農家や先住民のように、変革の到来を待ちたい気持ちもある。オブラドールを毛嫌いする友人もいるが、ベネズエラのように政治と経済が負の連鎖に陥る可能性は低いと思われる。半ば信仰のように彼に期待する者も含め、話した友人の中では支持者の方が多い。だが、新政権の実績、オブラドールおよび彼に影響を与える主体の性格を考えると、残念ながら、期待が実現する可能性は低い。「腐敗しがちな仲介組織を経由せずに」低所得層が直接受け取る支援を増やしたところで貧困がなくなるわけではないし、与党の各派閥が代表する集団の利害を考慮した政策を講じる必要も高まってくる。最もありそうなシナリオは、様々な政権側の努力にもかかわらず、第4の転換と呼べるような確かな変化を社会にもたらすには至らない。そこで、オブラドールの言説は次第に殉教者のごとき悲愴感を帯びてくるものの、それに聞き入るメキシコ人は徐々に減っていく、というものである。

- 1 『ラテンアメリカ時報』2017年秋号 「ロペス＝オブラドールとは何者なのかーメキシコ2018年総選挙の展望」2018年10月
- 2 総選挙前後から2018年内までの動向については、豊田の政治学的論考が参考になる (豊田紳「腐敗した共和国を救い上げるかーメキシコ・国民再生運動と新大統領ロペス＝オブラドールー」『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 35, No. 2 (2019), pp. 41-54)。
- 3 Averbuch, Maya y Kirk Semple, “La nueva Guardia

Nacional mexicana propaga miedo entre quienes migran,” *New York Times ES*, 24 de junio de 2019 (<https://www.nytimes.com/es/2019/06/24/guardia-nacional-migrantes-mexico/>, 2019年8月31日閲覧)

- 4 Pérez-Correa, Catalina, “México necesita una Guardia Nacional realmente civil,” *New York Times ES*, 8 de agosto de 2019 (<https://www.nytimes.com/es/2019/08/08/espanol/opinion/guardia-nacional-mexico.html>, 2019年8月31日閲覧)
- 5 Holland, Alicia C. and Ben Ross Schneider, “Easy and Hard Redistribution: The Political Economy of Welfare States in Latin America,” *Perspectives on Politics* 15-4, 2017, pp. 988-1006.
- 6 <https://www.mof.go.jp/budget/topics/futanritsu/sy3102c.pdf>, 2019年8月31日閲覧。
- 7 “No cede la violencia: suman 20,135 homicidios en el país de enero a julio,” *Expansión Política*, 21 de agosto, 2019 (<https://politica.expansion.mx/mexico/2019/08/21/mexico-cifras-homicidios-enero-julio-2019>, 2019年9月2日閲覧)。
- 8 Krauze, Enrique, “El mesías tropical,” *Letras Libres*, 30 junio 2006 (<https://www.letraslibres.com/espana-mexico/revista/el-mesias-tropical>, 2019年9月2日閲覧)、Bartra,

Roger, “Retropopulismo y extravagancia,” *Proceso*, 1 de septiembre de 2019。

- 9 Gilly, Adolfo, “Los mineros, los muertos, los políticos,” *La Jornada*, 3 de marzo de 2006 (<https://www.jornada.com.mx/2006/03/03/index.php?section=opinion&article=020a1pol>, 2019年9月1日閲覧)。EZLN (サパティスタ民族解放軍) も、オブラドールから (他の政治家、政党と自分たちは違うのだから信じて欲しいという) 呼びかけを何度も受けてきたが、それに応じることはなく、最近では批判を強めている。
- 10 オブラドールも再洗礼派に改宗しているが、宗教保守派の影響力のため、中絶や同性婚の合法化の実現は難しいとみられている。
- 11 “AMLO considera la desaparición del Coneval,” *El Financiero*, 25/07/2019 (<https://www.elfinanciero.com.mx/nacional/amlo-considera-la-desaparicion-del-coneval>, 2019年9月2日閲覧)。
- 12 Levitsky, Steven and Daniel Ziblatt, *How Democracies Die*, New York: Crown, 2018.
- 13 <https://interactivo.eluniversal.com.mx/encuesta-amlo/>, 2019年8月31日閲覧。

(うけた ひろゆき 東京大学大学院総合文化研究科教授)

ラテンアメリカ参考図書案内



『メキシコの伝統音楽 ～ソンとアルパの歌～』

早川 智三 知玄舎 (POD 書籍) 2018 年 11 月 218 頁 2,200 円+税

メキシコ音楽にはいろいろなジャンルがあるが、舞曲が歌曲化された「ソン」と欧州から中南米に持ち込まれたハーブが変化した「アルパ」がソンの中で地位を得てきたことなど、各地のソンの特徴と代表的曲を紹介している。



『メキシコ・ユカタン地方の音楽 ～カンシオン・ユカテカ～』

早川 智三 知玄舎 (POD 書籍) 2019 年 8 月 127 頁 1,600 円+税

メリダ等マヤ遺跡が多くあることで知られているユカタン半島「カンシオン／トローパー・ユカテカ」の作曲家、詩人、音楽家と代表的な曲を紹介している。

著者の中南米音楽への思い入れが伝わってくる、ラテンアメリカ音楽についての類書ではほとんど例を見ない解説書。著者は上智大学イスパニア語学科卒、日立製作所でパナマ駐在など長く中南米業務に従事し、退職後はスペイン語通訳・翻訳、音楽解説を執筆、『アルパの調べと歌 一南米パラグアイの音楽』『中央アメリカ音楽の旅「ある恋の物語」』などの既刊がある。

(桜井 敏浩)

(本書は amazon のみで取り扱い、POD 書籍として発売されている。① amazon の公式サイトを開き、②「書籍名」または「筆名」をインプットして購入手続きへ進む)